

マルコ 7 : 1-23 「邪悪な心の解決策：人が考え出した解決策の問題点」

7:1 さて、パリサイ人たちと幾人かの律法学者がエルサレムから来ていて、イエスの回りに集まった。
7:2 イエスの弟子のうちに、汚れた手で、すなわち洗わない手でパンを食べている者があるのを見て、
7:3 ——パリサイ人をはじめユダヤ人はみな、昔の人たちの言い伝えを堅く守って、手をよく洗わないでは食事をせず、7:4 また、市場から帰ったときには、からだをきよめてからでないと食事をしない。まだこのほかにも、杯、水差し、銅器を洗うことなど、堅く守るように伝えられた、しきたりがたくさんある—— 7:5 パリサイ人と律法学者たちは、イエスに尋ねた。「なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人たちの言い伝えに従って歩まないで、汚れた手でパンを食べるのですか。」 7:6 イエスは彼らに言われた。「イザヤはあなたがた偽善者について預言をして、こう書いているが、まさにそのとおりです。『この民は、口先ではわたしを敬うが、その心は、わたしから遠く離れている。7:7 彼らが、わたしを拜んでも、むだなことである。人間の教えを、教えとして教えるだけだから。』 7:8 あなたがたは、神の戒めを捨てて、人間の言い伝えを堅く守っている。」 7:9 また言われた。「あなたがたは、自分たちの言い伝えを守るために、よくも神の戒めをないがしろにしたものです。7:10 モーセは、『あなたの父と母を敬え』、また『父や母をののしる者は死刑に処せられる』と言っています。7:11 それなのに、あなたがたは、もし人が父や母に向かって、私からあなたのために上げられる物は、コルバン(すなわち、ささげ物)になりました、と云えば、7:12 その人には、父や母のために、もはや何もさせないようにしています。7:13 こうしてあなたがたは、自分たちが受け継いだ言い伝えによって、神のことばを空文にしています。そして、これと同じようなことを、たくさんしているのです。」 7:14 イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた。「みな、わたしの言うことを聞いて、悟るようになりなさい。7:15 外側から人に入って、人を汚すことのできる物は何もありません。人から出て来るものが、人を汚すものなのです。」 7:17 イエスが群衆を離れて、家に入られると、弟子たちは、このたとえについて尋ねた。7:18 イエスは言われた。「あなたがたまで、そんなにわからないのですか。外側から人に入って来る物は人を汚すことができない、ということがわからないのですか。7:19 そのような物は、人の心には、入らないで、腹に入り、そして、かわやに出されてしまうのです。」 イエスは、このように、すべての食物をきよいとされた。7:20 また言われた。「人から出るもの、これが、人を汚すのです。7:21 内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、7:22 姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、7:23 これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。」

導入

私の故郷は、英国のシドモスという海辺の町です。

毎年夏になると、たくさんの旅行者がやってきて、海水浴を楽しみます。

ビーチには、プロのライフセーバーの訓練を受けたボランティアの監視員が巡回しています。

今からお話するのは、海で溺れそうになった人の救助についてです。

監視員は、溺れそうになった人を助けるために、救護ボードで漕ぎ出しました。けれども、急いではなく、ゆっくりと行きました。浜辺では、人々が速く速くと叫んでいます。

そんな声をよそに、監視員はゆっくりとボードを進めました。溺れそうになっている人は、手をばたつかせて、「助けて！」と叫んでいます。

監視員がようやくその人のそばに着いたころには、溺れそうになっている人は力尽きる寸前というところでした。

監視員は海に飛び込み、いとも容易くその人を救助することができました。

監視員が救助した人を連れて浜辺に戻ると、そこにいた人々は監視員に非難を浴びせました。海で溺れそうになっている人を救助するのに、なぜゆっくり行ったのかと文句を言いました。

監視員は答えました。「人は自分の力が尽きたときに一番救助しやすいのです。まだまだ力が残っていると、救助しに来た人を押しやりしてしまって、ふたりとも溺れてしまう危険性があります。力尽きる寸前が一番救助しやすい状態なのです。」

人がクリスチャンになる過程にもこれに似たことが言えるでしょう。人は、自分ではどうすることもできないという状態になって、助けてくれるのはイエスだけだということに気づくのです。

マルコ 6 : 30-10 : 45 は、イエスが救い主であることを示します。

この個所には、「イエスが何から私たちを救うために来てくださったのか」が記されています。

それを理解しない限り、私たちがイエスに救われる必要性を理解することはありません。

2章の学びで、イエスが罪人を赦すために来られたことがわかりました。

けれども、罪人とは旧約聖書の律法を守ることのできない人たちのことだと考えていた人々は、イエスのことを誤解しました。

そこでイエスは、罪が何であるかを示されます。そして、罪の性質とその大きさについても説明なさいます。

同時に、人間が作り出した宗教がどれほど空しいかということも示されます。

この個所では、イエスはユダヤ教について言及なさいます。

しかし、それは日本の宗教を含む、世界中のどんな宗教にも言えることです。

先ほど読んだ個所には、おもにふたつのポイントがあります。

1. 人間が作り出した宗教の空しさ (1-13 節)
2. 人間の心の頑なさ (14-23 節)

1. 人間が作り出した宗教の空しさ (1-13 節)

まず、ここで、手を洗うことをはじめとするしきたりに関する個所を理解する必要があります。

旧約聖書のレビ記 11-15 章と民数記 19 章で、神は、汚れていると見なされる物についてユダヤの民にお教えになりました。

特定の動物や、産後間もない女性、重い皮膚病に冒された人などは汚れていると見なされました。また、死体に触れると、触れた人は汚れました。

汚れた人が触れた物はすべて汚れました。

異邦人は汚れていると見なされ、異邦人が触った食物も汚れました。

神は、それらすべての決まりに目的を持っておられました。それは、おもに、ご自身の選ばれた民を聖別しておくためでした。その他にも理由はありますが、今日はそれらの理由について詳しく学ぶ時間はありません。

ユダヤの律法は非常にシンプルで白黒がはっきりしていました。

ところが、イエス・キリストが地上での働きを始められる 400-500 年ほど前、律法学者と呼ばれる律法の専門家が現れました。

律法学者たちは、神が与えられた道徳的原則や十戒、食事に関する律法だけでは不十分だと考え、それらの律法を何千何万という細かい規則に分類しました。

その膨大な数の規則が、日常生活全体に関わります。

そのせいで、人々は規則でがんじがらめにされていました。

そこには、原則によって各自判断する猶予が与えられていなかったからです。

これらの規則は、イエスが死からよみがえられるまで文書にはなっていませんでした。

これらは「口伝律法（くでんりっぽう）」、または、しきたりと呼ばれていました。

ですから、ここに記されているのは、人が作った律法で神の律法に仕立て上げられたものです。

この個所では、手を洗うことと、市場などの公衆の場所から帰ったときの全身のきよめについて記されています。

食前と食事中にも手を洗わなければなりません。それは、衛生面を考えてのことではなく、霊的なきよさを保つためでした。手を洗う水も、特定の器に入れておかなければなりません。

また、洗い方にも決まりがありました。

手を上に向け、卵の殻 1.5 杯分の水を手首まで流しかけます。そして、握りこぶしで手をこすります。

これを繰り返しますが、二度目は手を下に向けなければなりません。

4 節には、市場から帰ったときは全身を洗うとあります。

ラビがこれらの律法を破っているのが見つければ、その職と立場を追われます。

ローマ兵に捕えられて投獄されたラビに関する記録が実際に残っています。このラビは、配給される水を飲まずにきよめに使ったため、水分不足で死んでしまうところだったということです。

ラビと呼ばれる神の律法を教える教師たちは、この規則を真剣に受け止めていました。

当時の律法学者やパリサイ人にとっては、これがユダヤの宗教でした。

ユダヤ教の道徳面は、膨大な数の規則に埋もれて見過ごされていました。

ユダヤ人はこのような手を洗う規則も自分たちの宗教の重要な一部分と捉えていました。そんなことは馬鹿げていると言う前に、日本の宗教にも似たような儀式があることを思い出してください。

また、私たちが気をつけていないと、キリスト教でも儀式や決まりをつけ足してしまう可能性はあります。そのようなものは、信仰にとって百害あって一利なしです。

律法学者たちは、イエスの弟子たちがしきたりに従っていないと問い詰めました。イエスと弟子たちが神の律法に背いていると考えたからです。

6-13 節で、イエスは律法学者とパリサイ人にお答えになりました。まずイザヤ書 29 : 13 を引用し、律法学者とパリサイ人の過ちを正そうとなさいました。

イザヤ書 29 : 13

29:13 そこで【主】は仰せられた。「この民は口先で近づき、くちびるでわたしをあがめるが、その心はわたしから遠く離れている。彼らがわたしを恐れるのは、人間の命令を教え込まれてのことにすぎない。

イエスは 6 節で、彼らをはっきり「偽善者」と呼ばれました。

この単語は、ギリシャ語の俳優を意味する単語から来ています。

俳優が誰かの役を演じると、見かけは本物のように見えますが、実際には本物ではありません。ただ演じているだけです。

優れた俳優はその役になりきると言います。その役を演じている間、その人になってしまうのです。

律法学者たちは、神の掟を退けて、自分たちで決まりを作り出しました。表面上はすべて正しいことを行っていながら、その行いは神に対する心の姿勢を映したものではありませんでした。

イスラム教の世界にもこのような儀式があります。一日に決められた回数神に祈らなければならない、ラマダンの期間中は夜明けから日暮れまで断食しなければならない、などがそうです。

このように、たくさんの行いをしなければなりません。

これは、本当にあった話です。あるイスラム教徒が、人を殺そうとナイフを持って追いかけていました。そのとき、祈りの時間を知らせる公衆放送がありました。すると、ひざまずいて祈り、その後また、殺そうと思っていた相手を追いかけたそうです。

キリスト教と目に見える儀式の遵守を同一視するのは最大の過ちです。

その間違いは、特定の宗教的儀式を聖さや善だと見なすことです。

聖書を読んで、祈って、教会の礼拝や集会に参加して、献金もしていたとしても、イエスをとおして神とつながることや、罪の赦しを得ることとは遠く離れている可能性もあります。

今日の聖書箇所は、どんなものであれ人の作りあげた宗教をイエスが非難されることを教えます。

私たちのキリスト信仰が本物であるためには、心からの改心がなくてはなりません。

私たちひとりひとりが、邪悪な心をもってこの世に生まれたことを自覚する必要があります。そして、どんな儀式も、私たちの心の状態を変えることはできないと悟らなければなりません。

自分の中に悪い心があることを認め、イエスによる赦しと心のきよめを求めて初めて、私たちの心は変えられるのです。

イエスは律法学者たちを「偽善者」と呼ばれた上で、彼らが「偽善者」であることを証明する行動の例を挙げられました。

イエスが挙げられた例は、所有物を神にささげる過程についてでした。

あるものを神にささげると、それを他の人が自分の益のために使うことは禁じられていました。

一旦神にささげられたものは、高齢の親を養うために必要であっても取り戻すことはできません。

具体例で説明しましょう。

ビジネスに成功したユダヤ人が、自宅の他に家を買って、神にささげます。

これは、「コルバン」と呼ばれます。

ところが、高齢の両親が住んでいた家が火事になり、火災保険もなく、住む場所を失ってしまいました。

家を神にささげた人は、両親が住むために家を使うことも、家を売って両親にお金を渡すこともできません。

十戒には、両親を敬いなさいという戒めがあります。必要があれば、高齢の親を養うために金銭を含むあらゆる援助をしなければなりません。

ですから、自分は不動産やお金を神にささげるすごく霊的な人間だと思っていたユダヤ人は、実際には十戒のひとつを破っていたこととなります。

宗教的きよさを明確にしようとする律法学者の試みをイエスは退けられたというのが、この個所のポイントです。

また、この後に続く異邦人の女とのできごとにもつながっていきます。

初代の異邦人信徒たちは、ユダヤ教の律法の多くを無視してもかまわないと言う一方で、神のみこころには従っていると言える根拠がイエスのことばにあると考えたでしょう。

適用

1. 自分の持論を正当化したり教理を疑ったりするために新約聖書の曲解を利用しようとするなら、今日の聖書個所の律法学者やパリサイ人と同罪になります。
たいていの場合、歴史背景を踏まえて聖書のみことばをそのまま真っすぐに読むことで、神のみことばの真理を学びます。
むずかしい個所でも、同じ真理を説明している他の聖書個所がたいてい存在します。
2. ふたつめの適用は明らかです。
私たちは、何を救いの根拠としているでしょうか。
目に見える宗教的な行いでしょうか。それとも、イエスが十字架上で成された御業による神との一対一の関係でしょうか。
私は何度も、洗礼を救いの根拠だと信じている人に会ったことがあります。
これは、陥りやすい過ちです。
まず改心して初めて、洗礼を受けるようにしなければなりません。
信徒が洗礼を受ける行為は、心ですでになされた神の働きを目に見えるかたちで示すしるしです。

実例

1987年に私がエジンバラの聖書学校を卒業したとき、「フェイス・ミッション」という宣教団体の伝道の働きに加わりました。私たちは、ボニーリグという小さな炭鉱町で働きをしていました。そこで、

ある夫婦と出会いました。ご主人は 70 歳、奥さんは 65 歳でした。私は、ふたりが神に罪の告白をし、イエスが罪から救ってくださったと信じる信仰の祈りを導く光栄に与りました。

デービッドとベティー・スコット夫妻は、それまでずっと教会に通っていました。ふたりにとって、それは、目に見える行いでした。けれども、ふたりの心の中に神の働きがなかったのです。残念ながら、ふたりが通っていた教会では、福音が明確に語られていませんでした。

デービッドとベティーは、赤ん坊のころに受けた洗礼と自分たちの良い行いによって天国に行けると信じていました。

今おふたりが天国でイエスとともにいることを、私は神に感謝しています。それは、ふたりが目に見える宗教は救ってくれないと気づき、イエスを信じたからです。

目に見える儀式によって神の御国へ入ることは決してできません。

イエスは、ヨハネ 3:3 で宗教を守る人におっしゃいました。「…人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」

2. イエスが、人間の心の頑なさに言及される。(14-23 節)

律法学者たちは、イエスの弟子たちのことを汚れていると非難しましたが、実際に汚れていたのは、律法学者たちの心でした。

ここで、問題の核心に迫ります。それは、心の問題です。

14-16 節で、イエスはあることを伝えるために群衆を呼び寄せられます。

当時、それは衝撃的な内容でした。

律法学者たちは、基本的に性善説を教えていました。そして、生きている中があらゆる汚れや悪が入ってくると考えていました。これは、世間のほとんどの人たちの考え方で、何も目新しいものではありません。

律法学者たちの教えは、汚れは外から入ってくるというものでした。

イエスは、汚れは外から入ってくるものではなく、人間の心の中にすでに存在するものだと語り、彼らの考え方にメスを入れられました。

このふたつの考え方、または神学は、対極にあります。

律法学者たちによれば、罪は外から私たちの中に入り込んできたものの結果だと考えていました。

一方、イエスは、問題は私たちの心の内側から出てくるものだとおっしゃいました。

つまり、考え方や行動に道徳的問題があるということです。

17 節には、イエスが群衆から離れて弟子たちを家の中に連れていき、たとえを理解できなかった弟子たちに説明なさったとあります。

イエスは 18-19 節で、特定の食べ物が人を霊的に汚すことはないとはっきりおっしゃいました。

原語のギリシャ語は、食べ物は排泄物となってトイレに流されるだけだと語ります。

マルコはここで、すべての食べ物がきよいと言っているわけです。

この個所でイエスがおっしゃったのは、神の御前に私たちを汚れたものとするのは、悪い心の結果として出てきた私たちの考え方や行いであるということです。こういったものが私たちを汚すのです。

それは、このような形で起こります。

本やテレビ番組、誰かの言葉、ほんの思いつきなどから、よくない考えや思いが生まれたとします。

その考えや思いにふけていると、それが悪い思いとなります。姦淫や盗みや殺人を実際には犯さなくても、もし捕まらないとわかれば、それを実行に移してしまうのです。

そういうことがクリスチャンに起こった場合は、神に謝らなければなりません。

ヨハネ第一 1:9 もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

私たちは、悪い思いにふける必要はありません。パウロはコリント第二 10:5 で、すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させなさいと勧めています。

しかし、ノンクリスチャンの人で悪い思いにふけても実行しない場合もあります。

イエスはここで、悪い思いにふけること自体が罪だとおっしゃいます。

ノンクリスチャンの人は、実行していなければそれは罪ではないと言います。

実際、ノンクリスチャンの人たちはたいてい、善悪を自分の裁量で決めます。

その裁量は、文化や育った環境に左右されます。また、自分の住んでいる国で社会的に容認されているかどうかなどにに基づきます。

ですから、文化や伝統、国民や政府などの期待することによって、この世の考える善悪は変わります。

今日は、重要な適用がふたつあります。

1. まだクリスチャンでない人たちのための適用。

私たちは神の目から見て罪深く、イエスの赦しを必要としているということに気づかなくてはなりません。

神は完全に聖なる存在ですが、私たちはそうではありません。神は罪に耐えることができません。ですから、神の御前に入るには、罪が赦されていなくてはなりません。

神は、ご自分の御子イエス・キリストを天からこの世に遣わされました。

イエスはこの世で完全な人生を送り、奇跡をとおしてご自身が神の御子であることを証明されました。

そして、惨い十字架上の死を進んでお受けになりました。

イエスは、身代わりのいけにえとなりました。人類の罪の罰を受けてくださったのです。

私たちが神の御前に入る方法は他にはありません。

自らの罪を悔い改め、イエスが私たちの罪のために代わりに死んでくださったことに基づき、イエスに赦しを求めることが唯一の方法です。

2. クリスチャンに向けた適用。

こちらでも違ったかたちで大きな課題です。

私たちは思考パターンを訓練する必要があります。

サタンがまず誘惑してくるのは、私たちの思いや考えであることを意識する必要があります。

サタンからだとはっきりわかる思いや考えにふけられないことが私たちの課題です。

パウロは、コリント第二 10 : 3-5 で次のように教えます。

10:3 私たちは肉にあって歩んではいても、肉に従って戦ってはいません。 **10:4** 私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。 **10:5** 私たちは、さまざまの思弁と、神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち砕き、すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させ、

私たちの思考パターンをとりこにしてイエス・キリストに服従させることは、霊の戦いにおける最大の課題です。

サタンが私たちの思いをコントロールするようになってしまえば、すぐに私たちの行動もコントロールできるようになるでしょう。

私たちは毎日、サタンの働きから思いを常にきよめるなければならなりません。サタンからの攻撃を受けていれば、なおさらです。

サタンは私たちの思いに影響を及ぼそうとしますが、私たちは勝利することができます。イエスが十字架の死によって、サタンに勝利してくださったからです。

イエスの血は、私たちの思考パターンをきよめてくれます。私たちが、日常の思考パターンはイエスの血に覆われていると宣言するならば、サタンは引き下がるしかありません。

今日、私たちは、あらゆる理由からイエス・キリストの死を覚えて祝います。

そのひとつは、イエスの尊い血の力です。

聖歌 425 番の「罪 重荷をのぞくは」という古い賛美をご存じでしょうか。

罪 重荷をのぞくは 血の力 主の血は
悪魔のわざをこぼつくしき力なり
力ある主イエスの血 受けよ 受けよ
力ある主イエスの血 受けよ 今受けよ
(聖歌 425 番)